



ウェルビーイングな日々

no 7

■先日、再放送された ある TV 番組を視聴しました。小児精神科医師が電車に乗りながら、保護者からの質問に答えるという番組です。「〇〇せんせい、教えて〜？」と。

■医師の穏やかな顔と車窓から見える田園風景とは裏腹に 質問内容は「保護者さんは悩んでいらっしゃる・・・」という緊張感が伝わってくる内容のものばかりでした。

アナウンサーが保護者からの質問の手紙を読み上げます。「～歳です。□□□という行動があり困っています。△△△と対応しています。これでいいのでしょうか？」

そういった質問に、まず医師は「○」「×」のどちらかのプレートを出し、理由をわかりやすく説明していくものでした。

■最後の質問では、それまで「○」か「×」の1つだけを挙げていた医師が、ちょっと時間をかけて考え、笑いながら挙げたプレートは 「○ ×」の両方でした。

■これはどうとらえたらよいのか？ 先生はにこにこ微笑んでいらっしゃる。

「分からない」「どちらとも言えない」「どちらでもよい」 いったいどういう意味なのか？ その質問への医師の説明は、「子どもの実態により『○』の場合と『×』の場合がある。我が子の『困っている』 行動への対応策は一つだけではない。子どもの実態やその状況によって違うのだ」ということです。

■その説明を聞いて安心しました。何から何まで答えが一つでは、その一つをどのように見つけたらよいのか、また悩みます。もしかしたら正解はあるのかもしれません。でも、一つの正解だけを求めすぎず、『幅』のある対応も大切だということを改めて教えていただきました。

